

---

# 銀髪が悪魔

辰巳 結愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

銀髪の悪魔

### 【Nコード】

N5977A

### 【作者名】

辰巳 結愛

### 【あらすじ】

私の名前はルフィ。旅の女傭兵である。今日も自慢の銀髪をなびかせつつ自由気ままな旅を続けている。女顔の神官・ダルと出会った事から、私の身の回りにはとんでもない事件が起き始めて…。

## 第1章：銀と蒼の邂逅（前書き）

「General and Priest」シリーズ第1弾（予定）。

今後の皆様の応援しで第2弾、第3弾といくかと思われます。  
稚拙かつ長い文章ですが、なにとぞよろしくお願いします。

## 第1章：銀と蒼の邂逅

「へえ。こんな所を1人で旅かい？」

…私は旅の傭兵である。非常に軽い装備をしているので、あまり傭兵…と言うか剣士には思われていないらしい。

今回もどうやら、私の姿を見て力モだと思ったのであろう盗賊たちが、私の周りをぐるりと囲んで言ってきた。

「……私を襲うつもりなら、やめておいた方が良いと思いますけど。」

「そう言われて、『はい、そうですか』とでも言うと思ったか？」

「…できれば言って欲しかったんですけど…仕方ありませんね。」

ふう、とため息をつき、私は彼らを完膚なきまでに叩きのめした…。

…あの盗賊たちのせいで余計な時間食っちゃったなあ…。

今回の目的地…フェイス・シティに着いた時はもう夕暮れ近くになっていた。

フェイス・シティの特徴はなんと言っても神殿の数。街を囲む正三角形をかたどる様に3大神である「孤高の神」、「灼熱の神」、「華麗の神」を祀る大神殿があるのをはじめ、小さな分院や古書も多く残る図書館が数多く存在する。当然のように巫女や神官と言いたいわゆる「神に仕える者」も数多い。故にこの街は別名「信仰の街」。

…ここになら、私の探すものがあるかもしれない。

淡い期待を抱きつつ、今日の宿を探す。…この時間では、もう図書館は閉まっているだろう。探しものは明日からでも良い。…時間はたっぷりあるんだし。

街を散策しつつ、宿を探し…気づく。どこからか私を見ている視線に。

…さっきの盗賊が逆恨みか？

思つてその視線の主を探すと…意外とあっさり見つかった。

海の色に似た髪はうなじ辺りで切られ、サファイアと見紛うばかりに澄んだ青い瞳、女の私ですら思わず見とれてしまう美貌。年の頃なら24かそこら。

山賊では、もちろんない。服装は「華麗の神」を祀る者特有の青い色系の縫い取りのしてある法衣。そう、あの格好はまさに…巫女…じゃ、なくて…

………し、神官？男！？え、え、ええええええ！？

驚いている私にむかつて、その神官（だと思つ）はどんどん近づいて来る。

「君は、『銀髪の悪魔』だな。」

私の目の前でとまるや否や、その神官（確定。声はばっちり男だった。）がそう言つた。

しかも疑問系じゃなくて断定しやがつたし、この人。

「…私は悪魔じゃありません。ただの傭兵です。そもそも『銀髪の悪魔』は、伝説上の人物の名では？」

『銀髪の悪魔』とは、2000年前に1晩で当時最大の都市であったコラプス・シテイをたつた1人で壊滅させた伝説上の人物。であると同時におとぎ話に出てくる「第4の魔王」としても登場する。この男がどちらの意味で呼んだのかは知らないけど、とりあえず否定しておこう。

「僕も神官の端くれ。人間とそうでないものの区別はつくつもりだが？」

「それはつまり、私は人間ではないと…？」  
「そうだ。」

うわ、はつきり言いやがつたしこの男！まさか完全に人のこと悪魔扱いするつもりじゃ！？一瞬でも見とれた私が馬鹿だった！

万が一に備え、相手に気づかれないうちに逃げの体勢を整える。

…さすがに神官サマ斬つて、お尋ね者にはなりたくないし。

「『銀髪の悪魔』なんて呼ばれているが、本当はそうじゃない。本当は不老不死を得た人間：『不死者』だろう？」

……

「黙っていると言うことは、肯定していると受け取っていいのかな、『銀髪の悪魔』さん。」

「……『銀髪の悪魔』と言う呼ばれ方は気に入らないんですが。」

「失礼。君の名前を知らないもので。僕はダル。ダル＝プリース。君は？」

「……ルフィ。ルフィ＝ジエネルです。」

につこり笑って右手を差し出す神官ダルに、私はむくれたような顔で返した。

私：ルフィ＝ジエネルは、竜の皮で作った軽装鎧と、無銘の漆黒の大剣を持つ、22歳くらいの銀髪美人である。瞳は光の加減によって灰色にも青にも見える。

ただし私は、彼：ダル＝プリースが言った通り、不死者と呼ばれる存在である。実際の年齢は2022歳位だったと思うけど、忘れた。

ちなみに2000年前に1晩でコラプス・シティをたつた1人で壊滅させたとされる『銀髪の悪魔』とは私のことで……その時はまだ不死者ではなかったんだけどね。それに多少この話誇張されてるし。いくら私でも1晩じゃ無理よ。……確か丸1日かかった気が。

……ま、まあそれはさて置き、私は「ある日」を境に不老不死の不死者になった。どうして「なった」のかも、いつの間に「なった」のかもよく覚えていない。

まあ、なってしまったものはしょうがないので、今の仕事……すなわち旅の傭兵なんてものをしている訳。お金は生活する上で必要不可欠だから。

別に飲まず食わずでも死にはしないけど、不死者だってお腹はすくし喉だつて渴く。何より食べる楽しみまで捨てたくないし！

そもそも不死者とは、何らかの理由により不老不死を授けられた（あるいは得た）人間の呼称である。ただしそれは伝説上での事とされている。そんな人間がうようよいたら、悪巧みをしよーとする人間も出てくるので、世間一般では不死者の存在は悪魔や魔女同様、ただのおとぎ話の中の存在と認識されている。

こっちとしては悪魔、魔女と同列に扱われるなんて迷惑…と言うより不快な事この上ないんだけど。

それにしても…いくら神官とは言え、普通の人間と外見上は大差ない私を見ただけで不死者とわかるなんて…ダルップリース…いたい何者！？

## 第2章：戦士と神官の契約

「ここではなんだな…。とりあえず『青の神殿』で話をしよう。」

「構いませんよ。私も、あなたに聞きたい事がありますし。」

『青の神殿』と言えば、この都市の北…「華麗の神」を祀る大神殿の名前。さすがに場所くらいは知っているし、ここからなら歩いて10分とかからない。

そう思い、歩き出そうとして…唐突に、景色が変わった。

今さっきまでであった夕日は影も形もなく代わりにあるのはほの明るい人工的な照明。青を基調とした内装に、振り返ればイルカを模した像。それはすなわち、海を統治すると言われる「華麗の神」を祀る神殿の中である事を示している。

…まさか、今…

「空間転移の術…っ！しかも2人同時に!？」

「僕は無駄な時間を費やすのが嫌いだね。」

ようやく私の右手を離し、にこやかな笑顔でいる女顔の神官に視線を向け、思わず1歩後ずさる。

「いや、時間がどのとかそういう問題じゃなくて…空間転移って、相当高位な神聖魔法じゃ…」

正直な話、この2000年近くで空間転移を扱えた人間は両手の指で足りる程度しか見た事がない。しかも大抵はかなりの年齢…老人と言っても差し支えないような者達だけだったと言うのに…ほんの24、5歳位のダルに、しかも2人同時の空間転移魔法が扱えるとは…にわかには信じがたい。

「……一応僕は色付き法衣…カラーローブをもらっているんだが？」  
やや無然とした表情で言うダルに対し、私は今度こそ完全に沈黙した。

色付き法衣を持っていると言う事は、相当高位の神官だって事よね…？私を一目で不死者と見抜いた事と言い、空間転移魔法を使っ



た事と言い…こいつ、教皇クラスの神官なんじゃ!?

私の考えをよそに、ダルはにこやかな笑顔になって私に向かって一礼をした。

「改めて自己紹介しよう。僕はダル＝プリース。通称、海神官。ご覧の通り、『華麗の神』に仕えるものの端くれさ。」

「端くれ」って…思いつきりど真ん中にいるような奴の台詞じゃないような…。

「…どうも、ご丁寧に。…で?その『海神官』様が、私如き『不死者』に何の御用なのでしょううか?」

「ルフイ、君…なんか怒ってる?」

私の言葉に、ダルは心底不思議そうに…と言うよりあからさまにビクつきながら返す。

…別に怒ってる訳じゃないんだけど。

「…怒ってません。」

「良かった。正直な話、僕は君を待っていたんだ。」

「……はあ?」

…すみません、宗教の勧誘なら即行逃げたいんですけど。私カミサマに興味ないし。

本日2度目の逃げの体勢を整えつつ、ダルの様子を見る。

「2週間ほど前に御神託が降りてね、それで」

「すみません、私宗教に興味ないです。」

「いや、人の話は最後まで聞こうよ。」

くるりと踵を返した私の肩をがっしりと掴み、ダルは私の逃走を阻止する。

じ…冗談じゃない!過去に何度「御神託」と称した自称神の代理人たちの寝言に付き合わされてきた事か!

「御神託でね、『死なずの者と共に世界を救え』って…」

「力の限り、目一杯、心をこめてお断りします!」

「ええっ何で!?!『世界を救う』なんて、これほど素晴らしい冒険は無いじゃないか!」

間髪入れず答えた私に、ダルは捨てられた仔犬の様な目をして訴えかける。が、いかんせんその瞳と言葉の間に多少なりともギャップがあるので、私の心を動かすまでには至らない。

「ルフィは世界が崩壊してもいいのか!？」

「正直な話、世界の危機とか平和とか興味ないんです。ただ私は日々の生活に困らなければ良いので。」

そう、私には目的がある。世界が崩壊する事で目的を…私に、「死」が訪れるのなら、それでもいいと思っている。

「…君がこの街に来た理由は、『不死者を殺す方法』が書かれたと言われる書物だろう?」

……………んなっ!

「何で…っ!」

「取引をしよう。僕と共に『世界を救う』手伝いをしてくれるなら、事が終わり次第、君の望む書物を渡す。」

「…………断つたら?」

「断らないと思うけどね。」

不敵な笑みを浮かべ、言い放つダル。

…この男…本当に何者なの?って言うかどこからこんな自信が出るの!?

「…わかりました。ただし、条件付きです。」

「どうぞ。」

「1つはあなたとタメ口をきく事。もう1つは1年間しか付き合わない事。…いいわね?」

それを聞いて…ダルは再び、深々と一礼した。

それはすなわち、契約の成立。

「それじゃあよろしくな、ルフィ。僕もできるだけサポートするよ。」

「こっちこそ。」

そう言えば…「世界を救う」って、主に何をするのかしら?

私が疑問を口にするよりも早く、ダルは私にっこりと笑いかけ…

「じゃあ、張り切って悪魔退治の旅に出よう！」

…な…

「何ですってええええっ！」

私の悲痛な叫び声とダルの朗らかな笑い声が、神殿内にこだました…。

### 第3章：悪魔と不死者の戦闘開始

悪魔退治…？

聞き違いでなければ、今ダルはそう言った…わよね？

「悪魔退治って…！私そんな事できない…訳じゃないけど、難しいわよ！」

「だから、僕も手伝うって。それに君は死なないんだから大丈夫だ。」

「さらりと無神経なこと言うなああつ！いくら私が不死者とは言えど、怪我すりや痛いのよ！」

「そこはまあ…ファイトとガッツと根性で。」

にこやかを通り越して、いつそ爽やかなまでの笑みを浮かべて言うダルを見て、私は思わず頭を抱えてその場にうずくまった。

…悪魔に物理的な攻撃は通用しない。なぜなら悪魔と称されるものは、大抵の場合世界に溜まった「邪気」とか「悪い心」とか「負の感情」…世間的にはひっくるめて「邪悪なココロ」なんて呼べるけど、そういった物が、何らかの形で具現化したものに他ならないからだ。だって「心」は物理的に壊せないでしょう？

通常、悪魔を倒すにはそれ専用の武器を使うか、神聖魔法を使って浄化するかの2通り。

…その神聖魔法だって、神に仕える神官や巫女、神聖魔法を研究した魔道士くらいにしか扱えない。

私の持っている剣は、一応悪魔も退治できる剣だけど…やはり、剣である以上は当てないといけない。

…悪魔ってすばしっこいんだもん。時々火とか吹くし。それに人間に比べてかなり体力があるしね。だから、いくら歴戦の勇者たる私でも悪魔と戦って無傷でいられる保障はどこにもないって訳で…まして、「ファイトとガッツと根性」でどうにかなる相手でもない事は嫌と言うほど知っている。

「引き受けてしまった以上はやりますけど…何か当てはあるのよね？」

「とりあえず、今現在…かな。どうやら、悪魔はあらかじめ僕たちに目を付けていたらしい。」

…は？

言っている意味が分からず、一瞬私は呆けるが…次の瞬間、無意識のうちに剣を抜き払い、唐突に來た背後からの一撃を止めていた。今の…何！？

くるりと振り返って攻撃の主を確認し、私はそいつを睨みつける。人間…に見える外見を持つてはいるが、口からは牙のような物がのぞいており、白目の部分が血のように赤く、金色の瞳には爬虫類のような縦に長い瞳孔が見て取れる。武器を持つている様子は無いが、まさに「鉤爪」と呼ぶにふさわしい爪がその指から生えている。「ほう…人間にしては敏い反応するじゃねえか。」

「まさか…悪魔！？」

「その通り。以前から蒼神官が俺たち『魔族』に対して何かしようとしていると聞いていたのだね。」

クツクと笑いながら言う相手。

「蒼神官じゃなくて海神官だっ！」

「いや、突っ込むところはそこじゃないでしょ！」

本気で怒ったように返すダルに対し、思わずこっちが突っ込む。目をつけられてた事に突っ込みなさいよ。

いきなり悪魔と戦う羽目に陥るとは思わなかった！もう少し心の準備が整ってから来て欲しかったけど、来ちゃった以上はどうしようもない、こっちもやるしかない、か。

「雇われただけなんだろうが、そいつと関わったのが運のつき。可哀想だが蒼神官もろとも死んでもらうぜ、人間の小娘！」

「楽に殺せると思わない事ね！」

幸い、相手は私を不死者と認識していないらしい。まあ、認識していたら「死ね」なんて言わないだろうけど。

鉤爪を構え、相手は一息に私との間合を詰めた。が、そう来る事はこちらも予想済み。剣を構えたまま軽く右へと飛ぶ事で、相手の一撃をかわす。

一撃で倒せると思っていたのだろう。予想が外れたためか、相手の動きが一瞬止まった。悪魔はその身体能力ゆえ、一撃必殺の攻撃を仕掛けてくることが多い。つまり、かわされてしまう事など頭の中に無い上に、攻撃の後は大きな隙がしやすい。

その隙を逃す私ではない！

「己の過信と、人間を侮った事を後悔なさい！」

ざくり、という感覚と共に、悪魔の体は横2つに分かれた。

さつきも言った通り、私の剣は少々特殊である。悪魔を斬る事ができるのも特徴の1つだけど、何よりこの剣、何から何まで黒曜石でできているかのごとく黒い。これはもう漆黒と呼ぶべき色をしているのである。

「馬…鹿な…この、俺が…人間の剣ごときに…！人間ごときにいいいいっ！」

「…残念ながら、あなた程度の悪魔とは何度も戦ってきていますから。」

断末魔の悲鳴を上げる相手に言い放ち…もう1度、今度は首を掻き切る。

そして、黒い靄のような物だけが、そこに残った…。

「いや、流石だな。こんな短時間で悪魔を倒すとは。今まで僕が見てきた中では最短記録だ。」

「伊達に長生きしてる訳じゃないの。」

拍手をせんばかりに浮かれているダルに対し、私は冷静に返す。

「そう言えば、その剣。刀身に古代呪文がびっしりと書き込まれているな。」

「…は？」

「その剣が黒いのは、魔剣として作られたからだろうな。よくそん

な強力な魔剣を使いこなせるもんだ。」

興味深そうに私の剣を指差しつつ、ダルはとんでもない事をさらに言った。

「魔剣、て…これが？」

恐る恐る剣から手を離し、思わずダルに聞き返す。

「ああ。悪魔が斬れるのも、たぶん魔剣だからだろうな。さらに呪文で切れ味をあげて…。どれくらい使っている？」

「そんなに長くないわよ。…700年位？」

「気づけ、普通はさびる。」

…そう言われれば。しかし…知らなかったとは言え、そんな恐ろしいもの使っていたなんて。

一般的な魔剣と言えば、持ち主の精神を崩壊させてただの辻斬りにさせたり、持ち主そのものを悪魔に変えたりと、色々曰くのついている物が多いんだけど…

「ああ、安心しろ。その剣は君以外になら魔剣としての力を遺憾なく発揮するだろうが、君にだけは絶対服従…ある意味、聖剣以上の存在だからな。」

「それってつまり？」

「君が持っている分には、心配ない。」

ああ良かった。…って良くないわよ！つまり、私がこの剣手放したら、ほかの人がこの剣の犠牲になるってことでしょ！？

…うあ、もう剣買い換えられない…。使いやすいからいいんだけど…。

「でも、なんであなたはそんな事わかるわけ？見ただけなのに。」

私の問いかけに、ダルは少しの間考えて…

「高位神官として身に付けた力…かな。」

と、どこか寂しそうな笑みを浮かべて言った。

「そんな事より、問題は『誰が僕たちの動きを悪魔に知らせたか』だ。」

「『僕たち』じゃ無くて『僕』にしておいてくれる？一応相手は私

が不死者だつて知らなかつたみたいだし。」

「その大元を叩かないと、ご神託を遂行した事にはならないな。」

「聞けよ、人の話。」

「と、言う訳で。やっぱ君と僕は旅に出なければならぬらしい！」

「何がどう、』と、言う訳』なのよおおっ！」

私の絶叫も無視して、ダルと私は悪魔退治の旅とやらに出る事となつた。

…この時はまだ、私もダルも、事の大きさがわかっていなかったのである…。



#### 第4章：見た目と中身の落差

「ところでルフイ、今回の黒幕は何者なんだと思う？僕は意外と魔王の内の1人じゃないかと思うんだけど。」

街を出る前の腹ごなしに入った街の食堂で、野菜サラダを口いっぱい頬張りながら、ダルは言った。

「…あなたがそこまで注目される存在とは思えないんだけど。ついでにナイフをこっちに向けないで。」

野菜サラダの何にナイフを使うのよ、こいつは。

「あ、悪い。普段あまり神殿の外には出ないものだから、つい嬉しくて。」

「そりゃ、その若さでカラーロープ持ちの高位神官じゃね。かなり小さい頃から神殿にこもってないところまでいかないでしょ？」

「いや、僕は見た目より案外年を取ってるんだよ。」

「2000年以上生きている私から見れば若者よ。」

にこやかなダルにつられたのか、私もつい笑顔で返してしまう。

「何が嬉しいのか、彼は私と会ってから終始笑顔でいる。…まあ、さすがに悪魔が出てきた時は笑ってなかった気がするけど。」

「でも、カラーロープ保持者って、案外魔王たちから目の敵にされているって聞いた事あるけどなあ。」

「…魔王は神とのにらみ合いで忙しいはずでしょ。人間まで相手にしてたら、神に付け入る隙を与えるようなものじゃない？」

「それもそうか…。」

うーんと唸り、ダルは何事か呟きだした。…ただ、その声は小さすぎて聞き取れなかったが。

「…ところでルフイ、君はどれくらい悪魔の事を知っている？」

「何よ唐突に。そうねえ…悪魔と呼ばれるほとんどが『邪悪なココロ』が具現化したもの。人間に近い姿をしている者ほどその力は強い。でもって、その悪魔の頂点に立ってるのが大魔王と呼ばれる

存在だつて事くらいかしら。」

3 大神と対を成すように、魔王も3人いる。「紅玉の魔王」、「黄玉の魔王」、「蒼玉の魔王」である。地上を支配するとされる「黄玉の魔王」が一般的に有名だけど、ほかの魔王も、知らない者はいない程度には有名である。ただ、どのような能力を持っているのかが明らかなのは、「黄玉の魔王」だけという話。

「ルフイ、君の知識は一部間違つてゐる。魔王たちは悪魔とは違う。」  
サラダの中のセロリだけを器用によけつつ、ダルはフォークをきゆうりに突き立てながら言葉を続ける。

「悪魔は、魔王たちにとってはただの食料に過ぎない。魔王たちの食料は主に生きとし生ける物すべての『邪気』。邪気の塊である悪魔は、魔王たちにとってはうつつつけの食料なんだ。」

……………

うあ、今とんでもなくグロい光景想像しちゃった。

「…ルフイ、君、今悪魔を頭からバリバリ食べてる魔王の図を想像しただろ？」

「う、ばれた？」

「この話をする、大抵の人間はそう思うらしいからね。」

皿の上には綺麗にセロリだけ残ったサラダが存在している。

… 案外器用な男ね、こいつも…

「魔王たちの『食べる』は僕たちの食べる事とは少し違う。そうだな… 吸収する、と言った方が良いか。」

「食べると言ふよりも飲む感覚？」

「まあ、概念的には近い。要は悪魔が魔王を恐れている本当の理由を知っておけばいいって事さ、ルフイ。」

につこり笑つて、まるで孫に物語を語るおじいさんのように、ダルは穏やかに言った。

… そう言えば… 私、こいつに聞こうと思つてたことがあったのよね。

「じゃあダル、今度は私から質問させてもらうわ。」

「年齢とスリーサイズ以外ならなんでもどうぞ。」

「誰が聞か！」

この期に及んでこんなボケをかます神官なんて見たことはおろか聞いたことすらないわよ！って言うか男のスリーサイズなんて聞いて役に立つのは服屋と医者くらいのもんでしょうが！しかも私のツッコミになんかしよげてるし。

「とにかく…さっきの悪魔、あなたの事を『蒼神官』って呼んでたけど…どういう事？」

「……さあ。悪魔連中が僕につけたあだ名じゃないか？ほら、僕の本当の法衣の色って青だし。」

「いや、ほらとか言われても私それ見てないし。」

現時点でのダルの格好は普通の神官同様、白い地に「華麗の神」に仕える者特有の青い刺繍が施されているもの。私にはその「蒼」がピンとこないのである。…まあ、確かに髪の色は青だけど、「蒼」と呼ぶにはちよつと無理あるし…

「そもそも僕、『蒼神官』って呼ばれるのは好きじゃないんだ。一応『海神官』って言う二つ名があるわけだし。」

「ふうん…」

心底嫌そうに言うダルの言葉に、私はほんの少しだけ…違和感を覚えた。

何が不自然という訳ではないのだけど…何かをごまかしている様な感じがする。それはこの2000年間で培われてきた勘がそう言っているのだが…何が妙なのかわからない。

「とにかく、今回のご神託にはさ、『邪を統べる者』って言う単語が出てきているんだ。魔王絡みだと見て間違いないと思うんだけど。」

話題を変えたいらしく、やや強引なまでにダルは話の方向を今回の黒幕…しかも魔王の方向に持っていきたいらしい。

…まあ、嫌がることをとやかく言うのは私の趣味じゃないから、別にこれ以上突っ込む気はないけど…

「……って言うか、私、今回の神の寝言……もとい、ご神託の全内容をまだ聞いてないんだけど。」

「神の寝言って……また失礼な発言だな。」

「知ってるもの。神がいかに無力な……いえ、力があっても何もしてくれない存在だって事を。」

苦笑を浮かべて言うダルに、私はあつさりとした表情で言い放つ。いくら私が神に祈っても、この体は元には戻らなかった。だから神は、何もしてくれない存在だと、私は思っている。

「それでも、すがって生きてみようとは思わないのか？」

「思わないわね。大体、自分以外の存在にすがって何とかなかったって、それは実力じゃないし。すがられる方も迷惑よ。」

「そう……か。強いんだな、ルフィは。自分の力を信じている。だからきつとそんな言葉が出てくるんだろうな。」

そういったダルの顔は、どこか寂しそうで……そして、どこか眩しそくに私を見ていた。

「……で、ルフィ曰く、『神の寝言』の全容だけど……」

「うあ、神官が神託の事を寝言で言った。」

「いや、その表現、実は結構気に入ってるんだよ、僕。」

はははと笑いながら、自分の存在をさらりと否定するようなことをのたまう。

こんなに神に反逆的な高位神官って、どうなんだろう……

「こんな内容なんだ。『邪を統べる者、この世を闇に満たさんとす。海に仕えし神官、死なずの者と共に世界を救う。邪の複製、死なずの者達の前に立つ。死なずの者、邪の一欠を用いて邪の複製を破壊せり。』。」

……「冗談。まさか本当に魔王絡みの話じゃないでしょうね？」

そりゃ、私だって「銀髪の悪魔」なんて呼ばれて恐れられてるし、場合によっては第4の魔王扱いまでされている存在だけど……本物の魔王に、不死者とは言え人間の私が戦って勝てる訳無いじゃない！

……と、待てよ……？

「ダル、今のを聞いていると…別に魔王がラスボスってわけじゃなくて、『邪の複製』とやらがラスボスなんじゃない?」

「ん…?確かに、言われてみればそうかも。でも、『邪の複製』って一体…?」

「うーむと考え込むダルの顔をのぞきつつ、私はつい声に出して聞いてみた。」

「わかりそう?」

「無理。」

「……即答!」

「あなた神官でしょ!?!それ位は理解できないでどうするのよ!」

「はじめて聞く表現を理解しろと言う方が無理だ。僕だって万能じゃないんだよ、ルフイ。」

「うわ、開き直りやがったし、こいつ。しかも何か爽やかな笑みを浮かべてるし!」

「とにかく、何とかなるさ。…僕って生まれつきのトラブルメーカーだから、一緒にいればきっと向こうから色々問題が出てきてくれるって。」

「爽やかフェイスのまま、とんでもない事をさらりとぬかし…ダルはそそくさと店を出る。」

「……野郎…勘定私に払わせたわね……」

「セロリの山と伝票が、私の目の前に置かれていた…」。

## 第5章：傭兵と戦士の価値観

…ダルは、自分かトラブルメーカーだといった。それにしたって…  
「いきなりこれは無いんじゃないの!？」

店を出た瞬間から、複数の悪魔が私たち2人を襲った。

「…言っただろう? 僕はトラブルメーカーだつて。」

「だからって、何でこんなにすぐに襲われなきゃならない訳!？」

「…神の思し召し?」

にこやかな笑顔で答えながらも悪魔の攻撃を軽やかによけるダルに、思わず一撃をぶちかましたくなるがそこはぐつと堪えて。私は襲いくる悪魔たちを情け容赦なく切り捨てる。

…が。いかんせん数が多すぎる。斬っても斬ってもきりが無い。

拳句、こんな街中で暴れられたら…当然、街の人たちにも被害が及ぶ。

「…せめて出てくる場所を選んで欲しかったわね!」

「意外と悪魔は市街地に出ることが多いんだよ。知らなかったのか、ルフィ?」

「うだうだ言つてないで手伝いなさいよ! 神官なんだから、悪魔退治用の魔法の1つや2つ使えるんでしょ!？」

私の苦情に、ダルはぼん、と手を叩き…錫杖を構えた。

「言われてみれば、僕だけ楽してるのも変だよな。」

ひよいひよいと悪魔達の攻撃をかわしつつ、ダルは口の中で何かを呟きはじめ…かつん、と錫杖で大地を叩いた。その瞬間!

悪魔たちに、大地から上へとあがった雷が突き抜ける! それだけに止まらず、悪魔の体を突き抜けた雷は再び悪魔の体を通り、大地へと舞い戻った。

…これは…

「邪滅迅雷…治癒を主とする神聖魔法の中でも、邪を攻撃する部類に入る高位魔法…っ!」

「その通り。さすがルフィ、伊達に長年生きてる訳じゃないな。」  
ふふん、と自慢げに鼻を鳴らしながら、ダルはもう1度錫杖で大地を叩く。すると今まで悪魔たちを貫いていた雷は消え失せた。  
今まで悪魔たちのいた場所には、微かに何かが焦げたような臭いと黒い靄があるだけ。

……

「…こんな事できるんなら、私じゃないんじゃ…？」  
「何を言う！ルフィがいてくれるからこそ、僕が呪文詠唱に専念できるんじゃないか！僕1人だったら、確実に負けてるよ。」

私の呟きを思いつきり否定する。

…つまり何か、私は時間稼ぎ要員か。

「それに、ルフィが連中をあらかじめ片づけてくれるからこそ、邪滅迅雷程度の範囲で何とかなる訳だし。」

私の冷やかな視線の意味を感じ取ったのか、慌てたようにダルは言葉を付け足す。

本心から言ってくれているのだろうけど…「邪滅迅雷『程度』」  
って辺りがムツとするわね。あの呪文だって、最初にダルが見せた瞬間移動に次ぐ位の高位呪文なのに。

「つまり、その…僕と君は、さ…」

「最高の相棒だ、と言いたい訳か？」

「そう、その通り！」

うまく言葉の出でこなかったダルに助け舟が出され、実に嬉しそうにダルが手を叩く。

が。今助け舟を出したのは私じゃない。どう聞いても男の声だ。ダルもそれに気づいたのか、はっとした様子で声の主を見る。

私の方はというと、すでに戦闘体勢を整えてある。後は相手の出方しだい…

「いやあ、いいものを見せてもらったわあ。大量の悪魔と、それに立ち向かう神官と女剣士。しかも2人ともなかなかの美人ときてる。」  
「あなた、何者！？」

拍手をしながら近づいてくる男に、牽制の意味を込めて問いかける。

見た目は17、8と言ったところか。真っ赤な髪に同じく真っ赤な瞳。革鎧を纏い、腰に短剣をぶら下げていることからすると、どうやらこの男…旅の「戦士」か。

「俺はデイル。職業は見ての通り戦士さ。最近悪魔が大量発生してるって言うんで、悪魔退治人みたいなこともやってるかな。」

「…あなたが、悪魔ではないと言う保証がないわ。」

「おいおい。その神官さんならわかるんじゃないのか？何せ、邪滅迅雷…だっけ？あれ使えるんだから、悪魔か人か位は簡単にわかるんだろ？」

「…彼が悪魔じゃない事は、僕が保証する。」

今までずっと男…デイルだっけ…？を睨むように見ていたダルが、ここに来てようやく口を開いた。

それを聞いて安心したのか、デイルとやはやはたら親しげに私たちに近寄ってくる。

「単刀直入に言っちゃうと、あんたら、俺と一緒に悪魔退治しないか？俺、なかなかの戦力になること請け合いだぜえ？」

「きっぱりとお断りします。」

「うわ。つれねえよお姉さん。」

「そうだよルフィ、戦力は多いに越したことは無い！」

…デイルの言葉に同意するように、ダルまでもが私の肩をつかんで説得にかかる。

……だが…わかってない。戦士という連中は、自分が楽しむために旅をし、様々なモノと…それこそ悪魔たちとだって戦う。彼らにとって、戦いとは娯楽なのだ。

だが、私たち傭兵からすればそれはなんとも迷惑な話なのである。だって、傭兵ってお金もらって戦っている訳で、それを戦士という安上がり…どころかただ働きしてくれる連中がいるなら、雇い主としてはお金のかからない方を選ぶのは当然である。



…傭兵からすれば、「こっちは生活かかってるんだよ」と言いたくなる相手なのである。

「お姉さん、頼むよ。俺、ここんとこ最近一人で戦うことに限界感じてんだ。俺のこと下僕扱いでいいからさ、頼むよー。」

「ルフィ、ここで彼を見捨てたら、絶対後悔するって！好き嫌いはよくないぞ！」

ぶち。

「セロリ嫌いのあんたが言うなあ！」

「セロリは嫌いなんじゃない！……食べられないだけだ！」

「同じことでしょうか！それが威張って言えることかつ！」

「待てルフィ、論点がずれてる！今はデイル君を仲間にするかどうかであって、僕のセロリ嫌いはこの際関係ない。」

……やっぱり嫌いなんじゃない。

心の中で突っ込みを入れつつ、もう1度、じいっとデイルの方を見る。

捨てられた仔犬のような目で、デイルはこっちを見ていた。

…なんで人間って、見捨てられそうになると皆同じような目になるんだろ？…確かダルもこんな目をして私を引き止めようとしていたような。

「…正直、私は戦士を仲間に加えるのは反対です。……が。私の雇い主が仲間にすると言っている以上、傭兵である私はそれに従うしかありません。」

渋々といった風に言う私の言葉を聞き…ダルとデイルの2人の顔が輝いた。

………決して、仔犬の目のWパンチにやられた訳じゃないわよ…うん。

「ところでデイル、あなた…自分が『強い』って言ってますけど、どの程度強いんです？」

「…ルフィ姐さん、俺にもため口きいてくれよー。俺の方が年下な

んだからさあ。」

街を出てすぐの森の中で、私はディールに問いかけた。

…って言うか「姐さん」って…。

「俺の強さはハンパじゃ無いぜ！今までの最高記録は4匹の悪魔を同時に相手して勝利。あ、これ素手オンリーの場合ね。」

「素手オンリー…？ということはディール、君は魔法が使えるのか？」

「そう！ダル兄さんみたいな神聖魔法は使えねえけど、それとは逆の暗黒魔法ならバリバリ使えるぜ！」

…一瞬、ダルも私も硬直した。

神聖魔法は「善」とか「正」とか呼ばれているものの力を借りて、「邪」を滅する魔法。

それに対して暗黒魔法は強大な「邪」の力を借りて「邪」を滅する…いわば「毒をもって毒を制す」魔法である。

神聖魔法にしる暗黒魔法にしる、使いこなすには相当量の知識と経験、そして魔力と呼ばれる個人の許容量が必要となるはずなのに…ダルもディールも、この若さで魔法を使いこなすというのは、魔法に関してかなりのセンスがあることになる。

…なんか、めげそう…。

「何でそこで固まるのさ。」

「驚いただけだ。…まさか暗黒魔法の使い手とは思わなかったなあ…。」

「って言うかその若さで魔法が使えることの方にびっくりよ。」

「若さって…おれ、ルフィ姐さんよりちょっとばかり年下だけじゃない。」

きよとん、とした顔でのたまうディールに、一瞬殺意沸きつつも私は周囲を見回す。

…どうやらまた、悪魔のお出ましらしい…。

いったいどれだけの悪魔が、私たちを狙ってるって言うのよ！

## 第6章：戦いと任務の目的地

「おっしやあつ！いきなり登場！くううううっ燃えるぜええつ！」  
本日3度目の悪魔の襲撃にうんざりしている私を尻目に、悪魔との戦闘初参加のディールは、その数に怯えるどころか嬉しそうに吼えた。

「元気だなあ、ディール。」

「私としてはもうこれ以上の襲撃は勘弁して欲しいわね。」  
すつと剣を鞘から引き抜きつつ、襲いくる悪魔を切り捨てる。

…何と言つか…

「低級悪魔じゃ私たちには勝てないってこと、そろそろ思い知って欲しいんだけど。」

「いや、それで高位悪魔に出てこられても困るんじゃないか？」

「まあね。」

ビシバシ悪魔を倒しつつ、私はディールの方を見る。

…おそらくは何らかの魔法のかかったグローブなのだろう。淡い赤の光を放つそのグローブで、ディールは次々と悪魔たちを殴り、吹き飛ばす。

「いやあ、自分で言うだけあって、なかなかやるじゃないか、彼。」

「のほほんとしてないでさっさと片付けてくれる？無駄な体力を使いたくないの。」

全く動く気配のないダルに、冷やかな視線を送りつつ苦情を申し立てる。

「ディールに任せてみるっていうのは？」

「大・却・下。」

自分で倒そうという考えは無いらしく、ダルは自分の意見の不採用に不満そうな声を上げた。

…高位神官ってこんなものぐさな奴でいいの！？  
「ルフィ姐さん、後ろだ！」

え…？

ディールの声を疑問に思う暇もなく、戦士としての勘が私の体を突き動かした。右足を軸にくるりと半回転しつつ敵の攻撃を受け止め、回転の勢いを利用して相手を吹き飛ばす。

ちいいっ！ダルに苦情を申し立ててる場合じゃなかったか！

「ルフィ姐さん、こっちの援護も頼みたいんだけど。」

「何する気！？」

「魔法使って、一氣に一掃。」

ぱしつと拳を手のひらに打ち付けつつ、ディールは宣言して…襲い来る敵を殴り倒しながらも、口の中で呪文を唱え始めた。

…呪文は、いわば「力」を借りる際の手続きのようなもの。これが無ければ、魔法はその力を発動してくれない。だから唱えなきゃいけないっていうのはわかってるんだけど…面倒くさいものよねえ、魔法って。唱えてる間は隙がでやすいし。

…なんて考えてる場合じゃない！ディールが使う魔法は暗黒魔法。ダルの使っている神聖魔法と違って、「邪」だけを限定して攻撃するものじゃないから…

「ダル、ディールから離れるか、めっちゃめっちゃ近くに行くかして！」

「ええっ！？何で？」

「ディールの魔法を食らいたいの！？」

「いや、それは勘弁…」

してください、とでも言おうとしていたのか。だがそれはディールの声にかき消された。

「イビル・ブレイズ！」

本来なら存在しないはずの漆黒の炎が、術者の呼びかけに応じるように出現した。

…イビル・ブレイズ…術者の視界に入る範囲内なら、術者以外の存在を焼き尽くす魔界の炎…

そんなものぶっ放されたら…

「ディール！あんた私たちを殺す気！？」

「…ああッダル兄さん、ルフィ姐さん！？何でそんなとこに！？」  
気づいてなかったんかい！思わず突っ込みそうになるが、それは襲ってくる炎によって阻止された。

すでに悪魔たちはこの炎に巻かれ消し炭と化してしまったようで、残っているのは私とダルだけのようである。

…この呪文で死ねないことは、経験上知っている。しかし、不死者の持つ驚異的な回復力をもってしても、この呪文によってできた火傷は完治するまでに2、3日の時間が必要となる。

…つまりは…食らうだけ損って事！2、3日も火傷の痛みを引きずりたくはない！

「…しゃーないなあ…」

「え…？」

ポツン、とダルが何事か呟いた。かと思いきや、彼は錫杖で大地を鳴らし…

「天界烈火」

…言うと同時に、ディールが呼んだ魔界の炎が消え、周囲は何事もなかったかのような静けさを取り戻した。

今…一体何をしたの…？

「うっわ。ダル兄さんってやつは凄え。」

目を輝かせながら、ディールはなおも言葉を続けた。

「今のつて、俺の暗黒魔法をダル兄さんの神聖魔法で中和したって事だよなあ！？しかも全く同じ力で！」

「目には目、炎には炎で…。本来の天界烈火はイビル・ブレイズ同様、自分の視界に入った『邪』を限定で焼き尽くす『炎』。マイナスにはプラスをとってとこな。」

さらりと言つてのけたけど…それって、ディールが使った魔力と全く同じ魔力を使つてぶつけないと完全には中和できないってことじゃない？それってつまり…ダルは魔法を使つてるところを見ただけで、どの程度の魔力を使つてのかわかるってこと…？

「て言うかディール。君、魔法を使うときはもう少し周囲を気にし

たほうがいいと思うよ。今回は僕がいたから良かったようなものの、下手をするとう味方を巻き込みかねない。」

「…以後、気をつけるよ。」

忠告され、しよげるようにディールは言った。

「…そう言えばさっき、悪魔の奴が変なこと言ってたぜ?」

あてもなく歩き出した私たちに、ディールが思い出したように声を上げた。

…どうやら、ダルに叱られた事から立ち直ったらしいわね。

「なんて言ってたんだい?」

「『お前たちを魔王の神殿へ行かせる訳にはいかない』とか何とか。」

……?

「ディール。そういうことは早く言ってくれ!これで今回の目的地がはつきりした。」

「ダ、ダル兄さん?」

がっしとディールの肩を掴み、瞳をキラキラさせて宣言するダル。

…うわあ、なんかすっごいやな予感…

「目的地は『魔王の神殿』!そこに今回の元凶がいるとみた!」

…ああ、やつぱり……。

まあ、行き当たりばつたりの旅じゃなくなっただけ、マシってこと…かしらね。

「魔王の神殿ってことは…相手って、『紅玉の魔王』!?面白そーになってきたぜ!」

「では改めて、魔王の神殿に向かって、出発だ!」

嬉しそくに声を上げる2人をジト目で見つつ、私は深いため息をついた。

## 第7章：魔王と神の居場所

…って言うか…

「目的地が魔王の神殿って言うのはわかったけど、何で元凶が『紅玉の魔王』な訳？」

私の問いかけに、2人共ギョツとしたような顔をした。

…何？私何かまずいこと聞いた？

「まさか『孤紅戦争』の話知らない人間がいたなんて…」

「ルフィ姐さんって、意外と世間知らずなんだな…」

すみません、昔から神話の類は聞いてもすぐに忘れるもので。

呆れたように言う2人に、思わず心の中で謝罪。

「『孤紅戦争』…文字通り、孤高の神と紅玉の魔王…天空を司る者同士の戦いのことだ。」

「確か、両者相打ち…孤高の神は紅玉の魔王を『魔王の神殿』に封印したものの、自分も力尽きたって話のはずだぜ？」

「ふうん…」

興味無さそうに呟く私に、2人はちよつとばかり落ち込みつつも話を続ける。

「3000年くらい昔の話だから、どこまでが本当の事なのかは定かじゃないけど、結構有名な話だよなあ。」

「神話の時代から神と魔王は戦ってきている訳だけど、『孤紅戦争』は特に有名で、この世界に存在する全ての生命がその戦いに参戦したんだ。」

私が生まれる1000年も前の話に、正直興味ないんですが。

まあ、そういう考え方してるから、端から忘れてくって話もあるんだろうけど。

「鷹と烏じゃ、あんまり絵にならないわよねえ…」

「…そういう物の捕らえ方が、君は。」

私のイメージをまんま言葉にしたのを、呆れたようにダルが返し

た。

一般的に、孤高の神は真紅の鷹、紅玉の魔王は深紅の鳥の姿をしていると伝えられている。…まあ、神や魔王なんだから、姿なんていくらでも変えられるんだろうけど。

……ん？

「てことは今、孤高の神は不在…つまり、天空を司る者は今はもういないってこと？」

「いや、そうじゃないらしいぜ。」

不敵な笑みを浮かべ、ディールは言葉を続ける。

「孤高の神は力尽きる直前、自分の分身を作って天空を守らせてるって話だぜ。」

「え？ 僕の知ってる話では力尽きたのは分身の方。実は孤高の神の本体は孤紅戦争の時、全く動かなかったって聞いてるけど。」

…どっちにしても、神のやることなのにスケールが小さいし、それ。

「とにかく…一応まだ存在はしてるわけね。」

「まあ、ね。」

相変わらず不敵な笑みを浮かべたまま、ディールは私の言葉を肯定する。

…それにしても…魔王相手、か。なんか大変なことになりそう…。

「ルフィ、君に聞きたいことがあるんだけど。」

夜も更けて火の番をしていた私に、眠っていたと思っていたダルが声をかけた。

ディールはと言うと、すぴすぴと憎らしくなるくらい心地よさそうな寝息をたてている。

「…寝てると思ってたけど。…何、聞きたいことって。」

さも当然のごとく私の横に座り、ダルはこっちを見ながら問いかけてきた。

「君は、その…どうして不死者になったのかな、と思って。」



「…覚えてないわ。前に言わなかった？」

「聞いてはいない。でも…そうか、覚えてないのか…。」

…なんでこいつはこんなことを聞くんだろう。興味本位で聞かれてるなら腹立つんだけど。

「原因を、一緒に探ってみる気はないか？」

「……は？」

素っ頓狂な声を上げ、思わずダルの顔を見る。

…ああ、やっぱり美人だなあ…これで男って言うのがもったいない…

「僕はね、ルフィ。君に会えて本当に嬉しいんだ。今までずっと独りきりだったから。」

独りきり…私もそうだ。2000年間、ずっと独りだった。

不死者であるが故に、誰もが私より先に死ぬ。どれほど仲の良い人でも、いつかは私を置いて逝く。

私の心が、孤独に耐え切れなくなっているのを、私は知っている。だから…私は、死にたいと思っている。これ以上、独りでいるのは辛すぎる。

「僕は今の状況を楽しみたい。だけど、独りでは楽しめない。…だから、君と一緒にいたい。」

…は？

「その論理展開の理由が分からないんだけど。」

眉をしかめて言う私に、ダルは一瞬困ったような顔をして…

「だあああつ！鈍い！鈍いぜルフィ姐さん！ダル兄さんの…男の決死の覚悟の告白が分からないなんて！」

告白って…

……って言うかデイル！？

思わず声のした方に向き直ると、そこには呆れ果てたような顔をしたデイルが仁王立ちで立っていた。

「寝てたんじゃなかったの！？」

「寝てたさ！そりやもうぐっすりと！でもなんかルフィ姐さんが変

な声を上げてゐるからなんかあったのかなと思えば、ダル兄さんが告白してるし！」

「いや、僕は別に告白してたつもりじゃ……」

ぶんすかと怒るディールに、なにやらもごもごと言っているダル。でもって、何がなにやら今一つ理解に苦しんでいる私。

「と……とにかく、考えておいてくれるか？この旅が終わったら、返事が聞きたい。」

じゃあもう僕は寝るから、と言って、ダルはそそくさと寝袋に入っていく。

後に残るは、未だ興奮気味のディールと、いまいち現状を把握し切れていない私だけ。

……わけ、わかんない……。

## 第8章：神話と複製の正体

「やっと着いたな。」

「ああ。結構長い道程だったぜ。」

魔王の神殿：紅玉の魔王が封印されていると言う場所にして、今回の私の旅の最終目的地。

ここに来るまでにダルの依頼を受けてから4日かかった。

日数はそれ程ではないにしろ、悪魔の襲撃回数が半端じゃなかった。

…100歩進む毎に襲ってくるって言うのはどういっ了見よ！って言うかそんなに悪魔って多いわけ！？

…まあ、何はともあれ、最終目的地にしてラスボスの元まで来れたんだから、今のところは良しとしましょう。うん。

「さて…魔王本体が出てくるか、それとももっと別の何かが出てくるか…それは見てのお楽しみって事で。」

一歩前に足を踏み出し、神殿の中に入る。

同時に感知するのは、魔王が封印されているとは思えないほど清浄な空気。

…ここが元凶だって言うなら、もっとおどろおどろしい感じかと思っただけ…

「孤高の神の封印は、3000年経った今でも健在ってことだな。」

デイルもこの空気を感じとっているのか、心底感心したように呟いた。

「…本当にここが今回の件の元凶なの？神の寝言、見事に外れたみたいだけど。」

「だから、ご神託。どうなんだろう、まだご神託の文章の意味が完全には理解できないから…」

そう言えば。

確か、「邪を統べる者、この世を闇に満たさんとす。海に仕えし

神官、死なずの者と共に世界を救う。邪の複製、死なずの者達の前に立つ。死なずの者、邪の一欠を用いて邪の複製を破壊せり。」って言う全文だっけ。

「邪の複製」って言うのが何なのか、今一つ分からないのよね。

………そう言えば……

「ダル、ちよつと聞きたいことがあるんだけど。」

「ん？何だ？」

「ディールの存在は、この神の寝言……もとい神託のどれにあたるわけ？」

この神託の中身には、ディールの存在が示されていないような……

「ダル兄さん！ルフィ姐さん！こっち！」

ディールの声のする方に向かうと、そこには……

「魔剣……？」

ダルが呟く。

そこにあつたのは、台座の上に深々と突き立てられた一本の赤い剣。離れていても分かる程の禍々しい気を放っている。

「あれが、封印された魔王……？」

「いや、あれは……魔剣、ロート。紅玉の魔王の剣だ。」

私の言葉を否定したのは、意外にもディールの方だった。

薄笑いを浮かべ、ゆつくりと彼はその剣に近づく。

「ディール！？よすんだ！それは人間に扱いきれる魔剣じゃない！」

ダルが止めるべく手を伸ばす。が、まるで何かに弾かれたように大きく後ろへ吹き飛ばされた。

今のもつて、魔法障壁！？でもディールは何事も無かったかのようにこの部屋に入……

「確かに、人間じゃあ扱いきれないよな。」

にやりと笑い、ディールはこちらを向き……躊躇うことなく魔剣に手を伸ばし一気に引き抜く！

神の封印が施されているはずのその剣は、随分あっさりと台座から引き抜かれ、ディールの手の中に収まった。

そう、私が認識した瞬間！私の視界いっぱいにディールの姿が映った。

……速い！

思うと同時に、左胸に鋭い痛みを感知。続いて後ろの壁に串刺しにされたことを認識する。

「ディール…あんだ、何、を…！」

「うーん、さすが不死者。心臓を刺し貫かれても、生きているとは。」

な…

「ルフィが不死者だと、どうして知っているんだ、ディール！」

「ん？そりゃ知ってるさ。だって…俺が今回の『元凶』なんだから。」

な…に？

一瞬、頭が混乱する。

分かっていることは、今私は完全に串刺しにされていると言うことと、ダルが無事であること。そして…ディールが、敵であること。昔話をしようか。」

さらに深く剣をめり込ませながら、嬉々としてディールは話し始めた。

…私の悲鳴など、気にも留めずに。

「孤紅戦争の話の真実を教えてやるよ。神話じゃあ、孤高の神は分身を残して倒れ、紅玉の魔王は封印された、なんて事になってるが、真実はその逆さ。」

嫌な、予感がする。それと同時に何かを納得している自分がいる。「つまり、魔王こそ分身を残して倒れ、神は逆に封印された…そういう事か。」

「そ。さっすがダル兄さん、飲み込みが早いねえ。」

くつくと笑いながら、いつもの口調でディールは話す。

「それで、『邪の複製』…なわけ、ね。」

「ん？何、ルフィ姐さん。」

「つまりは…… あんたが、『邪の複製』。魔王の、分身……てことでしょ？」

神託の文章の中に、ディールの存在はきちんと示されていたってわけだ。

ただし……私たちの、敵として。

「そんな……なら、初めに会った時点で僕らを倒せばよかったはずだ！」

「やだなあ、ダル兄さん。俺はこの剣を取り戻したかったんだよ。魔王としての力を増幅させるこの剣が、ね。」

言つと同時にずり、と私の心臓から剣を引き抜く。

……これで、一回死亡、か。

咳込みつつ、私はディールの方を見る。

「……まあ、あんた達のことは嫌いじゃあないから……1日あげる。決めてきてくれよ。俺と戦うか、否かを。もつとも……」

顔一面に邪悪な笑みを張り付け、ディールは宣言した。

「どうせこの世界、壊す気なんだけど。」

……覚えているのは、そこまでだった。

次に記憶しているのは、どこかの宿で心配そうに私を見ているダルの姿。

……どうやら、失血がひどすぎて気を失っていたらしい。

「……ルフィ、明日までまだ時間がある。……ゆっくり考えるといい。」  
それじゃ、と言って、ダルは部屋から出て行った。

……さて。私はどうしようかな……。

## 第9章：不死者と魔王の決戦

…「魔王の分身」に与えられた一晚という猶予は、あつと言う間に過ぎていった。

相手が望むは世界の破滅。だけど人々は、何も知らずにいつもと同じ生活をはじめている。

正直、この世界がどうなろうと知った事ではない。

魔王の力があれば、私を殺す…いや、消滅させる事も容易いだろう。

…だけど…今の私は…

「おはよう、ダル。」

「……ああ。」

「…朝から暗い。」

びすつと音を立ててダルの脳天にチョップが入った。それに対し、彼は恨みがましい目をしてこっちを見た。

「何するんだ！こんな時にっ！」

「声大きい。」

もう1度、同じようにチョップをかます。そして彼も、やっぱり同じような反応を返した。

「あのねえ…『こんな時』ってどんな時？」

「そりや当然……」

「私、喧嘩の前つてもつと落ち着くべきだと思うのよね。」

朝食として頼んでおいたベーコンエッグをぱくつきながら、ダルに笑いかける。

「喧嘩って…！」

「だってそうでしょ？相手がただ単に『魔王の分身』ってだけで。」

「そんなにあっさり言える相手じゃないだろ！君は消滅するかもしれないんだぞ！それとも…」

はた、と彼の動きが止まって顔色が変わる。何か、恐ろしい事で

も思いついたように。

「…それが願い…なのか？」

恐ろしげに、でもどこか悲しそうな顔で、ダルは呟くように問いかけた。

「奴に消滅させられることが、君の願いなのか！？」

「あのさ、私、『喧嘩の前』って言ったわよね？」

「あ、ああ。」

何を言おうとしているのか分かっていないらしく、ダルはぼかんとした表情で私を見た。

「負けるつもりで喧嘩なんかしない。相手が誰であろうと、ね。」

につこり笑って言った私に、ダルは今度こそ呆然とした表情になった。

私は私の信じた道を歩む。相手が魔王だろうが神だろうが関係ない。今、私がしたいこと。それは…

「相手が気に入らない。だから私は奴…紅玉の魔王の分身、ディー・ルを倒すのよ。」

「勝てる…？ 思っているのか？」

思考停止から抜け出したのか、いつもよりやや低い声で問いかけてくるダル。

…こいつは…本当にもう…

「言ったはずよ。『負けるつもりで喧嘩はしない』って。勝算とか何とかは二の次。要は気の持ちようよ。」

「だけど…！」

「ああもう！ ごちゃごちゃうるさい！ 大体、魔王の食事…エネルギー源は生きとし生ける物の邪気なんでしょ？ だったら明るく前向きに！ 邪気ばら撒いて相手喜ばせてどーするの！」

だんっ、ぱきつと私はテーブルを叩いて言った。それに対してなのか、ダルは驚いたような表情になり、私の顔をまじまじと見つめた。

「ルフィ…」



「言っておくけど、私は傭兵。雇い主はあなた。あなたの命令に従うけど、首になっても奴を倒す気でいるわよ。それを踏まえた上であなたはどうするの?」

「僕は…」

「あんたが言ってた『ご神託』…ここで終わるって…私を解雇するって言うならどうぞ、ご自由に。」

「いや、そうじゃなくて…」

しどろもどろになりながら、ダルは必死に言葉をつむぐ。が、言い訳なんて聞きたくない。私が聞きたいのは…

「来るの!? 来ないの!? どっち!？」

「い、行く。行くよ。それは決めていた事だ。だけど僕が言いたいのはその事じゃなくて…」

恐る恐る、ダルは私の手を指差してこういった。

「君のフォーク、皿を貫通してテーブルに刺さってるけど…いいのか?」

「………あ。」

……いきなり、幸先悪いかも……

「…へえ、逃げずに来たのか。」

「まあね。」

デイルと名乗っていた男は、見下すような顔つきで私達に言い放った。

魔王の分身ゆえの自身からか、私達といた時よりかなり不遜な態度である。

「正直この世界がどうなるうと知った事じゃないんだけど、虚仮にされたままって言うのは気に入らないのよ。だから……」

ちゃきつと剣を構え、私はデイルに向かって言い放つ。

「倒してあげるわ。私の全存在をかけて、ね。」

「じゃあ…終わりにしようか、この茶番劇を!」

デイルが吼える。と同時に奴はまっすぐにダルに向かった。

「まずは鬱陶しい蒼神官、貴様からだ！」

「だから、海神官だつて言ってるだろう！」

「ちゃっかり言い返しつつ、ダルはその錫杖でディールの一撃を防ぐ。が、攻撃を受け止めはしたものの、力の差から軽く後ろへと吹き飛ばす。」

「ふーん。意外と戦えるんだな。神官と思って甘く見ていた。いつもはルフィ姐さんに守ってもらってるだけだったし。」

「甘く見てるのは、ダルだけじゃないんじゃない!?」

「呟くディールに、私は後ろから斬りかかる。」

「不意打ちのつもりなら、もっと静かにやるものじゃねえ!?」

「別に、不意打ちにするつもりはないわよ！」

一撃をあつさりとかわされ、急いで次の攻撃を繰り出す。

そもそも声を上げたのは戦士としてのプライドと…相手の注意をこちらに引き寄せるため。ダルを倒されちゃ、ちよつと困る事になるのよね。

「前から思ってたけど、不死者とは言えなかなかの体捌きだよな。」

「不死者になる前はさぞかし有名な兵士だったんだろう？」

「一応、銀髪の悪魔、なんて呼ばれてたわね！不本意だけど！」

「…貴様が……!?」

一瞬、ディールの動きが止まった。何故かは分からないが、とにかく今がチャンス！

「ダル！ブチかまして！」

叫ぶと同時に剣を遠くに放り投げる。

「何を……！」

私の行為の意図が読めず、はつきりと驚愕の表情を浮かべるディール。

だが次の瞬間！

「邪滅迅雷！」

ダルの声が響くと同時に、ディールの周囲に邪を滅する雷が放たれる。剣を投げたのはそのため。だって私の剣って魔剣なんだもん。



「…待たせた、な！」

呆然としているところを突かれ、気がつけば私の体は吹き飛ばされた勢いで木々をなぎ倒していた。

衝撃波…！？

「く…が…っ」

これで本日、2回目の「死亡」。一応回復するけど…何なの、今の馬鹿力！衝撃だけでこんなの何て…まともに喰らったら回復に時間がかかるわよ！

「ルフィ、無事かつ！？」

「一応無事。…だけど、このままじゃ無事じゃなくなるかも。」

「…え？」

「言ってなかった？不死者はね、短時間に人間が5回死ぬダメージを喰らうと、次の日の出まで行動不能…休眠状態に入るのよ。」

鳥の攻撃から逃げつつ言った言葉に、ダルは走りつつも絶句していた。

…事実なんだからしょうがないでしょ！？

「早く言え！そういう事は！」

「言って信じた？」

「信じていないのは君の方じゃないか！？」

私が、ダルを信じてない…？

…そうかもしれない。信じてないから言わなかったんだろう。だとしても…

「この状態でおしゃべりとは、余裕だな。」

…また来た！

鳥の翼を何とか剣で受け止める。

…なんで翼を受け止めただけで金属音がするのよ！まさかさっきの剣が、この翼になってるんじゃない？

「どうした？倒すんじゃないかったのか？」

魔王の嘲笑。どうやらまだ、私達を見下しているらしい。

「…倒すわよ。魔王の分身を倒せるとなると、この私…第4の魔王

と呼ばれている『銀髪の悪魔』しかないでしょ!」

もう一度剣を構えなおし、「魔王」を睨みつける。

勝算は……ほとんど無い。でも、「全く無い」訳じゃない。一か八かの賭けに出る!

ダッシュで相手の懐に入り込み、自分の剣を、心臓があるはずの場所に突き立てる。が、聞こえてきたのはぎいんと言う金属音のみ。手ごたえの無さを感じ、私は慌てて剣を退く。

「無駄、だったな。」

頭上から魔王の声が聞こえる。しかもちょっと笑ってやがるし。

しかしまあ、そんな事はいいつの羽攻撃を受け止めた時から承知していた事。本当の狙いは……

「その目! いただきよ!」

言うが早い、私は鳥の目に向かって剣を深々と突き立てる!

……羽は剣を通さなかった。体内に入らない限り、魔剣はただの剣と同じである。しかし逆に体内に入ったら、この剣は魔剣としての威力を遺憾なく発揮するということ。ならばどの生物でも鍛えようの無い目や口内には刺さるのではないか。そう思ってやってみただけ……

「見事に、刺さってくれたみたいね!」

まるで私の考えがわかるかのように、刀身から黒い火花がバチバチと走り出す。

「ぎ……? が、ああああああっ!」

鳥が悲鳴を上げてのけぞる。私は振り落とされないように必死で剣を握りしめつつ、さらに深くまで突き立てる。

しかし相手も必死。翼で私の体を叩く。どうやらこの翼、1枚1枚が鋭利な刃物状になっているらしい。私の体は叩かれるたびに血飛沫をあげる。

……ヤバイ、そろそろ3回目の死亡かも……

思ったその瞬間、手が離れた。同時に魔王の翼が私の喉笛を掻き切った。

「しまっ……」

声を出したつもりだが、出てきたのは喉から溢れる血のみ。これで4回目の死亡、確定である。

もうこれ以上、ダメージ喰らえないじゃない！

思いながら落下に対するショックを整えながら思い……そして、見た。ダルが不敵な笑みを浮かべ、錫杖を振る瞬間を。

「ファントム・グレイド！」

声が響く。そしてダルの放った魔法が、私の剣に直撃、そのまま魔王の体内で炸裂した！魔王の、声にならない悲鳴が聞こえる。

…… ああああああつ！私の剣！

「大丈夫か、ルフィ！？」

「取りあえず死亡4回。っていうか私の剣をどうしてくれるのよ！魔法なんかブチかましてくれちゃって！」

喉の傷はどうやらもう塞がったらしい。……やっぱり不死者の再生力って怖いわあ……

心配そうに見つめてくるダルに対し、思わず怒鳴り返す私。

いくら魔剣とは言え、あの剣、結構重宝してるのに！

「剣の事は心配ない。今使ったのは神聖魔法ではなく暗黒魔法……それも、あの魔剣が増幅するタイプの、な。」

「……あ、あんた……暗黒魔法も使えるって……」

暗黒魔法は悪魔などの邪の力を借りたもので、普通神官なんかは「汚れたもの」扱いして手出しなどしようとしなないし、文献を読む事すら禁じているらしい。そもそも普通の生活をしている分には神聖魔法だけで充分だし。

……なのに、こいつ……ダルは今、暗黒魔法を使った。それもかなり強力なものを。

「前に、覚えた事があってね。僕は神聖魔法と暗黒魔法の両方を使えるんだ。」

「そついう事は、早く言いなさいよ！」

「切り札は最後まで取っておかなきゃ。……僕の過去の経験則だけど。」

「  
ダルは勝ち誇ったような笑みと共にきっぱりと言い放ち、ぐつたりして動かない魔王の方を見る。」

一方の私はにこやかに笑いかけて…

「ま、あれだけの攻撃を加えたんだし、流石にもう…」

大丈夫、と言いかけた時だった。ダルが私を突き飛ばしたのは。

「何する……の、よ。」

「何とか…5回目の死亡は…阻止できたか、な……」

そこにいたのは。

魔王の分身に心臓を刺し貫かれている、海神官だった。

## 最終章：將軍と神官の…

「ふん…邪魔しやがって。」

ダルの心臓から剣…私の剣を引き抜きつつ、魔王の分身は吐き捨てるように呟いた。

支えを失った体は、その場に小さな音を立てて倒れこむ。

「人間の分際で。この俺をここまで追い詰めた事は誉めてやる。」

私に剣を返しつつ一歩、奴は近付く。

私は剣を拾って一歩、奴に合わせて後に退く。

さっきの攻撃が効いているのだろう。奴の足取りは、ややおぼつかない。

「もう一撃喰らっていたら、確実に消滅していた。」

すでに奴の体は、烏ですらなくなっている。完全なる…ケモノ。

片目はさっきの攻撃で潰れたままだし、体の内部からはブスブスと煙が上がっている。

…にも関わらず、私は奴を恐れている。威圧されている。

「しかし俺は魔王！人間如きに負けるなど、断じてありえない！」

ケモノが、吼える。同時に私の背に悪寒が走った。

………これは、何？

今まで相手にしてきたモノとは格が違う。

わかつていたつもりなのに、覚悟が足りなさ過ぎた…？

「もはや手加減や躊躇などしない！貴様という存在を、この世界から完全に消し去ってやるっ！」

ケモノがその腕を振り上げ、その図体からは想像もつかないようなスピードでその腕を振り下ろした。

………まだ死にたくない！

ぎいいんっ

ギリギリのところで、私はその腕を受け止めていた。

「死にたかつたんじゃなかったのか？」



言うが早いか、魔王は空いているほうの手を振るい、再び攻撃を仕掛けてくる。しかしそれも予想済み。あっさりと剣を退き、大きく後ろへと跳ぶ。

「…負けるつもりはない。負けるわけにはいかない…。私は、自分がこうなった原因を知るまで、死にたくない！」

…私は、孤独に耐え切れなかった。だから「死にたい」と思った。けど今、なぜかはわからないけれど…心の底から、「死にたくない」と思っている。

こうなった原因…誰が私を不死者にしたのかを、知りたいと思うようになった。それは、少なからずダルが影響している。

恐怖より、今はダルを殺された怒りの方が上回っているらしい。

…あの、変な神官の敵討ち、なんて私のガラじゃあないんだけど…  
「見せてあげるわ。……人間の底力って奴を！」

ケモノの腕が再び襲い掛かる。が、その動きにはもう慣れた！

ひょいと身をかがめ、その体勢のまま一気にケモノに近付く。とは言え奴も流石にさっきの攻撃を意識しているのか、もう一方の腕で眼球はガードしている。

「同じ攻撃など！」

ケモノの咆哮が周囲に響く。同時にその声は衝撃波となって私を襲った。こっちは思いもかけなかった攻撃に軽く吹き飛ばされる。

…っだあああっ！これは流石に反則じゃあ！？

着地しつつ、もう1度体勢を立て直す。ここまで厄介な手負いのケモノは初めてだわ！

「そもそも、貴様1人ではこの俺を倒す事はできん！先の攻撃には蒼神官がいたからな！」

「…ダルの魔法の援助があつた、て事は認めるけどね。」

「だろっ！？魔法の使えない不死者一匹…殺せぬ俺ではない！」

嘲笑混じりに言う相手に対し、こっちは不敵な笑みを浮かべて剣を構えなおす。そして…



期の一撃を繰り出してきた。

「貴様も…道連れだああっ！俺と共に消滅するがいいイイイイイ  
イイ」

…もう、ダメだ…！

そう思った刹那だった。やたらと聞き覚えのある声がしたのは。

「…消えるんは、お前だけや。…『魔王の分身』。」  
とす。

予想外に軽い音と共に、ケモノの体から一本の棒が生えた。どう  
見ても、ただの木の棒なのに…それは確かに、ケモノの体を貫通し  
ていた。

「な…なぜ…？」

ケモノか私か…どちらが発した言葉だったのかはもう定かではな  
い。

今度こそ本当に、紅玉の魔王の分身は、黒い靄と化して、消滅し  
た。

それは魔王の分身としては、あまりにもあっけなさ過ぎる最期だ  
った。

「無事か？ルフィ。」

その靄のあとから出てきたのは、青い髪に青い瞳、女の私でも美  
人と思ってしまう程に美しい顔をした、神官だった。

「でも…まさか君が魔法を使えるとは思ってへんかったなあ…。」

いつも通りのにこやかな笑みを浮かべ、神官は私に右手を差し出  
した。

「どないしたん？そんな狐につままれたような顔して。」

「あなた…」

「ん？ああ、ひょっとしてこの喋り方か？氣イ高なると、この言葉  
になんねん。」

堪忍な、といつもと違うアクセントで話しだす神官を、私はいま  
だ呆然とした表情で見つめている。

「何で…？」

「ん？」

「何であなただが生きてるのよ…ダル。」

「何でって…？」

心底不思議そうな表情を作り、神官：ダルは私の顔をのぞきこんだ。

「だって、心臓を刺されてたじゃない！」

「ああ、それで『一回死亡』やな。」

法衣の穴の開いているところを押さえつつ、彼はにこつと笑いかける。

……まさか…こいつ…

「今まで黙っとったけど、僕も不死者やねん。」

「な…っ！？」

「前に言ったやん？『案外見た目よりも年を取ってる』って。」

にこにこ笑いながら、あつさりとんでもない事を、この馬鹿神官はのたまった。

「でもまあ、これで一件落着、だな。」

あ、話し方元に戻った。

「そう…ね。……疲れたあ…。」

呟くと同時に、私の意識は闇へと堕ちた…。

どうやら知らないうちに、5回死亡のダメージを受けていたらしい…。

「本当にいいのか？今回の報酬。」

あれから3日経って、私の体もすっかりよくなった。

…まあ、不死者の再生力をもってしても3日かかるってあたり、どうかと思うけど。

次の旅に出るべく、仕度を整えていた時にダルは心底意外そうに聞いてきた。

「うん。…誰が私をこんな体にしたのか、知りたくなっただし。時間は、いくらでもあるしね。」

につこり笑って答える。それを聞いて、ダルはほんの少し、寂しそうに笑った。思えば彼も、悠久の時をすごす事になる存在なのだ。

……

「私は旅に戻るけど、あなたはどうするの？」

「僕は……」

言葉にするのを躊躇っているような彼に、別の問いを投げる。

「ダル。自分を不死者にした奴の事、知りたくない？」

意味ありげな笑みを浮かべ、私は戸惑う海神官に更に問う。

「一緒に、旅しない？ 独りは何かと面倒で。でも、2人なら色々楽しめそうじゃない？」

「……いいのか？ 僕と一緒にいても。」

おずおずと問いかけてくる彼に対し、満面の笑みを浮かべて答える。

「ダメなら誘わないわよ。って言うか、あなたが先に言ったのよ？」

『自分と一緒にいないか』って。」

ここでようやく、ダルの顔に初めて会った時のような笑みが浮んだ。

「それじゃあ、今からは雇い主とかじゃなくて仲間って事で。…改めてよろしくね、ダル」プリース。」

「ああ。こちらこそよろしく、ルフィ」ジェネル。」

互いに一礼しあい…その宿を出た。

私は…私達はもう、独りじゃない。

時の流れから置いていかれた私達を、何が待ち受けているかは知らないけど…何であろうとぶちのめすのみ！魔王の分身すらも倒した私達だもの。まあ大抵の事は乗り切れる…ハズ！

私とダルの旅はまだ続くけど…それはまた、別の機会って事で！

## 最終章：將軍と神官の…（後書き）

これにて、「General and Priest」の最初の話である「銀髪の悪魔」は終了です。

ご要望があれば今後の話も書いて行きたいと思っています。

それでは、ここまで読んでくださった皆様方、どうもありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5977a/>

---

銀髪の悪魔

2010年10月8日13時52分発行